

「新しい知の領域を予感させる」 解釈学の世界観

多摩大学 名誉教授 望 月 照 彦



中庭 光彦 著

東京 都市化と水制度の解釈学

都市と水道における開発・技術・アイディアの政治

2021/3/30 刊行

単行本：238 ページ (税込) ￥2,420

ISBN-10 : 489390177X

ISBN-13 : 978-4893901774

中庭光彦氏は、幅広い学識と持ち前の知見、そして全国を飛び回る行動力で企業や産業の経営学だけでなく、地域開発やまちづくりまでの領分を研究対象にしている。多くの学問分野を視野に入れているが、その中でもユニークでコアとなるフィールドは「水の社会・経済学」ではなかろうか。このたび新著として出された『東京・都市化と水制度の解釈学』が、まさにその分野であろう。

彩藤ひろみ氏に、書評を依頼され送られてきた新著を開いた時に、その本の独特な香りと、一見地味なタイトルにもかかわらず何か私はこれまでに長く忘れられていた知の分野への魅惑的誘いを、“ひらめき”のように感じていた。

『水』というテーマが掲げられた時に、私たちは何よりも先ずは地球が「水の惑星」であることを、喚起させられるのではないだろうか。この巨大な宇宙に星の数はどのくらいあるのか予測するのを戸惑うほどであるが、人類初の宇宙飛行（1961年）を行ったガガーリンが宇宙船から地球を見てそのあまりの美しさに叫んだ言葉は「地球は青かった」であった。その青さはむろん地球の7割が海によってカバーされているからで、太陽系は元より地中深く氷で固まっている星や水蒸気として帯状の雲に覆われた星々は宇宙の中に数限りなく存在するのであろうが、たゆたう海を持った惑星は地球以外にそう多くはないように思える。そしてその海（水）の存在によって、無機物から有機物を生み出すタンパク合成を可能にさせたことを考えると、私たちは海の、すなわち水の存在によって奇跡的に生命を、そして意識という不思議な自己認知をも生み出すことができたわけでもある。

この一人の宇宙飛行士の「地球は青かった」という一言の感慨が、すなわち人間が地上からではなく、宇宙空間から完全な地球の総体を望む視点を得たことは、私にはその後の人類の思想に大きなパラダイム転換をもたらした背景と覚えてならない。それが生物学者のラブロックらの自己調整機能を持つ『ガイア理論（1960年代に仮説が生まれた）』、すなわち生物たちの存在だけでなく地球そのものが生きている生態系を持つものとして、水の存在が私たちに「人工生命」に至るまでの新しいパラダイムの基底にあったように、私は考えている。この流れが化学者であるプリゴジンら

によって『混沌からの秩序（1979年）』として考察され、散逸構造の理論から『カオス理論』に展開されていく。これらの先端思想は、アメリカのニューメキシコ州にあるサンタフェ研究所に集約され、現代社会の最大の思考の武器となる「複雑系研究」に結晶化が期待されているのだ（まだ美しい結晶ではないが）。

私には、『水』の存在はこの複雑系理論を生み出した実に魅力的な存在として映るが、同時にまだ記憶に新しい気候変動による熱海伊豆山の多大な災害をもたらした「鉄砲水」としても存在する。谷間から砂利や汚泥を含んだ濁流が流れてくる映像を見た時に、あの3・11に起こった東日本大震災の海から堤防を乗り越えてやってきた津波の映像を思い出していた。海からも山からも災害をもたらす気候変動による社会問題としての『水』にも今後目を向けなければ、と強く感じている。

ところが、である。中庭光彦氏の水問題の専門家としての眼は、複雑系社会や気候変動による社会問題ではなく、「都市化」「水制度」とそして「解釈学」に向けられている。実に地味な研究スタンスだし、社会問題として重要か、と思える疑問が浮かばないわけではない。しかし、実はこの中庭氏の研究視点と手法である「オーラルヒストリー」と「解釈学」を持ち出したところに複雑系研究や気候変動による水社会問題を超越する研究アーキテクチャーを提示しようとしていることに、実は私は気付いたのである。オーラルヒストリーとは、中庭氏が磨いてきた社会調査の手法で、特に歴史過程を軸に関係者に徹底的なヒヤリングを行い、定量調査、定性調査に並んでいわば推量調査を基盤にした手法といってよいだろう。当然、「推量」には鋭い洞察力と深い解釈の力が求められる。新たなパラダイムを確立するための、「意味」の創造が問われている現代社会で、未だ深く考察されていない「解釈学」を打ち立てようとしている中庭氏の思惑に、私は深く反応したのである。

「複雑系」や「自己組織化」の学問は未完である。しかし、『解釈学』は西欧の歴史に在って実に厳密な研究がなされてきた知の体系である。そう、それはキリスト教の教義が生み出されて以来のもう一つの大きな学問体系であった。例えば、イタリアの言語学者のウンベルト・エーコーの小説『薔薇の名前』などを持ち出すまでもなく、たくさんのキリスト教を信奉する欧米諸国の修道院などで、何百年と叡智を集めて教義研究を重ねてきた知のスタイルが『解釈学』であったのだ。日本の仏教的な研究の積み重ねでは、意味の創造・解釈においては「悟り」に置き換えられて、ついぞ深い解釈学の誕生は日の目を見ることはできなかったのではないかと、私は私の日本文化と学問スタイルの解釈である。

私の寡聞にして知らない分野であるが、多摩大学が平成1年からスタートした時期に、尚美大学学長を務めた教育哲学者の松田義幸氏に客員教授として教える機会があった。松田氏はイギリスのキリスト教哲学者であるヨゼフ・ビーバーなどの研究を通して、解釈学に造詣が深かった。日本において貴重な解釈学の先達にもっと教えるを受けておきたかっ、いまにして思うことである。

何よりも、解釈とは創造である。そして「制度」とはソースティン・ヴェブレンの考え方は「資本」である。それを社会的共通資本として新しい社会の民主的資本に育て上げようとしたのが経済学者・宇沢弘文であった。「社会制度」の大切さを、さらに宇沢氏の著作からも学んでおく必要があるだろう。

最後に一言。日本人の血の中に、「水争い」の記憶が農耕民族の遺伝子として、色濃く残存しているのではないかと、いうことである。「水資源」は異常気象によって日本の国土に台風などの影響で大量に運ばれてきても、また世界的に見ても将来的には枯渇状態に陥るであろう。その時にも、中庭氏の「水資源の意味の創造と、社会資本としての水資本の解釈学」は、頼りになる名著として読み解かれていくのではないかと。それらが私の、中庭氏の新著への解釈（講釈）である。